自然保育推進事業　活動報告書

1.　学校法人奥山学園　幼保連携型認定こども園　桜ヶ丘幼稚園

2.　令和３年度活動概要

【環境構成に関する事】

自園は、令和３年１１月に自然保育認証Ⅱ型を認証して頂いたばかりの新米の園なので、差し当たって、自然保育に対するテーマを掲げた１年ではありませんでした。では、なぜ自然保育に取り組もうと思ったのか、そのきっかけを、この度の活動報告事項として述べさせて頂きたいと思います。
自園は、呉市は焼山というエリアに位置します。山間部にある私立幼稚園として、設立当初から、山登りや、多種多様な動物の飼育、野鳥の観察や餌付けなど、様々な自然保育を展開して参りました。しかしそれは、２０年以上も前の事、いつしか質の高い幼児教育への追求が、『設定保育の内容過多』になっておりました。具体的には、保育者は『やらなければならない設定保育』が多過ぎて、折角目の前にある自然に、触れる機会(時間)が無くなってしまっているのが現状です。行事に対する取り組みも同様です。運動会や作品展、お遊戯会に至るまで、ボリュームが年々増加していき、保護者の目を意識し過ぎた、いわゆる『魅せる保育』が主流になり、子ども達の自由な時間が少なくなってきている、その結果、自然保育から目を背けているのではないか、そう感じられました。それと同じくして、我々のエリアの少子高齢化の波は激しさを増し、多くの園で定員割れが相次ぎました。自園も例外では無く、年々減少していく園児数に頭を抱えていた丁度その頃、このエリアで、子育て施設として生き残っていく為には、自園にしか無い強み『ストロングポイント』が無ければいけない、そう考える様になりました。そして行き着いたのが、『自然保育』言うなれば【初心に帰る】事でした。初代理事長が、なぜこの地に園を築いたのか、それは、このエリア特有の自然環境があるからです。そこを、今一度追求していく事で、現在の幼児教育・保育のスタンダードになりつつある【主体性】【共同性】【継続性】も育まれるのではないかと推察しております。これから、少しずつですが自然保育認証園として恥じぬ活動報告が出来ればと思っております。

【遊びの事例】

① 柿もぎ体験

園内に柿が植わっているので、毎年秋には、子ども達と共に、収穫体験を行っている。子ども達は、脚立や梯子に上り、直接手でもぐ事を体験する。登園道に植わっている樹木なので、子ども達は、この日に向けて期待感を膨らませ、また、柿の成長を一年中確認する事で食育活動にも繋げる。但し、柿を収穫して終わりではなく、その後、布切れで磨く事も学ぶ。そうする事で、柿=食べ物、だけでは無く、食べ物=売り物、という社会の構図も学ぶ。

② 氷と水の関係性

記録的な寒気のその日、戸外で自由遊びをしていた年長児、すると、一人の女児が水たまりに氷が張っているのを見つけた。保育者は、本来別の保育内容を設定していたが、この子の発見を、そして氷に興味を持ったその一瞬を大切にしようと思い、急遽、氷を使った保育に展開した。それは、子ども達が氷を商品に見立てて、お店屋さんごっこを始める、というものだった。しかし、どの氷も大きくて、売り物としては難しい。思い通りにいかない形ばかりの氷を前に、ある男児が言った。「壊そうぜ！」せっかく大きな氷なのにもったいない、

と思うのは大人だけで、子ども達は、お店屋さんの陳列商品の方が重要なのだ。その後、大きな氷をバラバラに割る事に成功した子ども達。「ガラスみたーい！」一人はカレー屋さん、一人は宝石屋さん、様々なお店屋さんを展開した。しかしながら、あくまでも氷は氷、３０分も経たないうちに、溶けて水になってしまった。しかし、これは水と氷の不思議さを知る良い機会と思い、水は寒くなると凍って氷になる事、氷は暖かくなると溶けてしまう事を伝えると、子ども達の方から、「じゃあ、色の付いた水を今日バケツに張って帰ると、明日にはかき氷が出来る？」や、「お花を入れたら凍るかな？」など、自発的な保育の展開が見られたので、保育者は、翌日も氷を使った保育をする事となった。しかし、翌朝、氷は張っていなかった。なぜならば、気温が想定より下がらなかった為だ。しかし、これこそ自然保育なのだ、だから面白いし、リアルな保育記録になると感じた。保育者は、設定保育以上に、イメージを膨らませ、子ども達の発言や、自然の変化を想定しなければ自然保育は成り立たないと感じた。

③　イチョウの葉っぱ

園のイチョウの葉っぱが大量に落ちるこの時期、保育者と子ども達でイチョウの葉っぱを使って保育を行った。イチョウの葉っぱのベッド、イチョウの葉っぱで花束、お部屋に持ち帰って製作帳に貼り付けて秋の作品展にもつなげた。

④　朝顔を育てる

朝顔の種植え体験を行い、お花が咲くまでの水やりを年中児が行った。子ども達は、自分た

ちが植えた種が芽を出し、そして花が咲くまでの経過を楽しみ、そして、朝顔が咲いた頃には、色水遊びに展開していった。

⑤ 泥んこの日/虫探し

・暑い日は、裸足になって気が済むまで泥んこ遊びをする子ども達。ホースや戸井、スコップを駆使して、町作りを行っている。

・園にはどんな虫がいるのかな？みんなで虫メガネを持って、虫探しを行った。自然環境はあっても、いざ、虫を捕まえるとなると、『蝶々』や『アリ』くらいしか見つけられない子ども達。するといつしか、プランターや植木鉢の下が穴場であると悟った子ども達は、我先にとダンゴ虫を捕まえていた。

【自然体験活動にあたり工夫した点】

工夫というよりも、自然体験アドバイザーの大村先生にお越し頂き、園内での自然体験は今後どのように進めていくべきかを相談させて頂いた事が、園にとって大きなポイントだった様に思います。自然保育を行う上での心得、保育の幅、保育の可能性をご教示頂いた事で、自信を持って保育者への理解へとつなげる事が出来ました。新しい事を始める際は、トップダウンでは無く、必ずそれを説明し、それに賛同してくれる共通認識を持った職員が必要だと思います。今回、自然保育に自園が力を入れる事に、多くの職員が賛同してくれたのは、大村先生の言葉が教職員に響いたのだと思います。少しずつですが、自然体験と主体性を取り入れた園として、地域の方々に認知される様、努力したいと思います。